最優秀4作品など表彰

受賞作は木材利用軸にビジネスモデル確立

ウッドデザイン賞2023

日本ウッドデザイン協会（東京都、隈研吾会長）は、「ウッドデザイン賞2023」の表彰式を開いた（11月14日付6面一部既報）。最優秀賞のほか、大阪・関西万博特別賞や優秀賞、奨励賞を表彰した。9回目となった同賞の応募総数は355作品で、最優秀賞から奨励賞までの上位受賞は31作品。木材活用を軸に異業種間連携や地域創生につながるビジネスモデル、事業戦略を構築している応募が増え、応募内容はよりレベルアップした。

協会を代表して加藤博文代表理事は、「年々応募は増え、内容のレベルは高くなっている。新産業につながることにも期待できる」と応募状況を評した。

来賓代表の宮下一郎農林水産大臣は、「日本の人工林は利用期を迎え、有効活用をしての更新が不可欠。積極的活用は林業や木材、山村の振興につながる」と受賞作品の意義を述べた。隈研吾会長はビデオメッセージで「暮らし方の向上や新価値創造などは一つの業界では難しい。連携こそが大切」と話し、業種間連携のさらなる活性を求めた。

9回目の今回について赤池学審査委員長は「上位受賞作品は社会性、クオリティに加えてビジネスモデルや戦略性が確立されている。単純に木を使って作品を作るだけでは受賞が困難になっている」と作品が持つストーリーの重要性を示した。

今回も農水省、経済産業省、国土交通省、環境省の後援を受け、各省で計4つの最優秀賞を設定した。

最優秀賞受賞者と来賓、ウッドデザイン協会関係者

農林水産大臣賞は「林業×福祉連携プロジェクト〝森tebaco〟」（パワープレイス、社会福祉法人幸仁会川本園、木育・木づかいネット）、経済産業大臣賞は「Gywood テーブル用天板」（ナイス）、国土交通大臣賞は「北海道地区FMセンター」（竹中工務店、西條産業、よろずい森林組合、ハルキ、オホーツクウッドピア）、環境大臣賞は「森の麓の拠点〝さとのえ〟の取り組み」（サカモト）が受賞した。

経済産業大臣賞の杉田理之ナイス社長は「大径材をいかに利用するかの視点で考え、開発した。木質化へ、建築以外にも使えるよう努力したい」と意欲を見せた。国土交通大臣賞の金田崇興竹中工務店東京本店設計部構造第2部門構造3グループ長は「建て方は西條産業、製材・プレカット」はハルキ、CLTはオホーツクウッドピア、木材調達はよろずい森林組合の協力で完成した。非住宅木造を広めるプロトタイプとして作り込んだ」と連携の重要性を強調した。

今回は大阪・関西万博特別賞も発表。「FARM FRONTs eki－noen」（米山工務店）、「蒜山そばの館」（STUDIO YY、岡山県真庭市）、「ごはんや一芯 京都店」（ムーンバランス）が受賞した。

PRO
フヨウプレカット

杉人工林は貴重な野生動物生息地

ニホンモモンガが多用途に活用

森林総研

話題

杉花粉症対策で社会的にも注目を集めている杉人工林だが、人工林でもいくつかの絶滅危惧種の生息地として重要な役割があることが研究されている。森林総合研究所は5日、ニホンモモンガが杉人工林のなかで巣を作ったり、冬季食料（花粉）などに生かしたりと、多用途に利用していることが分かったと報告している。

ニホンモモンガは世界で本州と四国、九州にのみに生息するリス科の動物だが、絶滅が懸念されている一種。鈴木圭森林総研九州支社主任研究員はニホンモモンガに関するこれまでの断片的な知見を集約し、植林された杉林でニホンモモンガの営巣や滑空移動の経路、花粉が食料に利用されていることなどを明らかにした。

一般的に針葉樹人工林は生物多様性が低いと考えられていたが、世界的には人工林でもいくつかの絶滅危惧種の生息地として重要な役割があることが分かってきた。日本国内の山林は約4割を人工林で占めているにもかかわらず、生物多様性の保全などに結び付く野生動物の生息地としての機能性はほとんど研究されてこなかったという。

同報告書ではニホンモモンガが人工林に生息する要因を目撃情報などが記載された文献を収集して分析。発見場所は約6割が人工林で、人工林と隣接する二次林や天然林で目撃されているとし、営巣も細かく裂いた杉の樹皮が多く活用されていたり、各種樹木の葉や花、芽、種子などを採食していたりしていた。特に冬季には杉の花粉を含んだ糞が目立つことから、杉の雄花を頻繁に食している期間があることも指摘している。

杉人工林はニホンモモンガの生息地でもある

結論的にはニホンモモンガの生息地として杉人工林は機能性があり、その生息には人間の影響を受けやすい側面があるとした。人工林の管理・工夫によって希少な野生動物と共存可能な環境を創出できる可能性も指摘している。

さらに、人工林でも大規模な伐採はニホンモモンガ等の野生動物の生息地を損なうことにもなり、主伐なら小面積で皆伐するか、間伐なら滑空移動が可能な幅の列状間伐を採用するといった人間側の配慮が大切になってくることにも触れている。

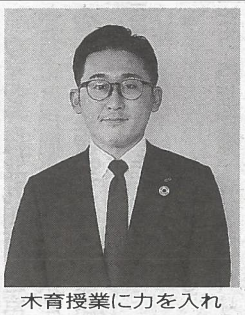
なお、同研究成果はJournal of Vertebrate Biology（9月7日号）でも公開された。

木育授業で木材業界を発信

知育玩具も好調

日東フローリング

日東フローリング（宮崎県都城市、東宗一郎社長）は桧、杉などの各種建材販売のほか、地域の木育授業にも力を入れている。木材業界へのイメージを向上させ将来的な就業者増につなげること、木を伐って利用することは環境破壊ではないとの理解を一般消費者に深めてもらうことが大きな狙いだ。


木育授業に力を入れる東社長

東社長が講師を務める木育授業は今年で3年目を迎えた。宮崎県のイベントに参加したり、学校や幼稚園、保育園を回るなどしたりして年間10回程度行っているという。内容は木育授業や桧材の箸作りだ。

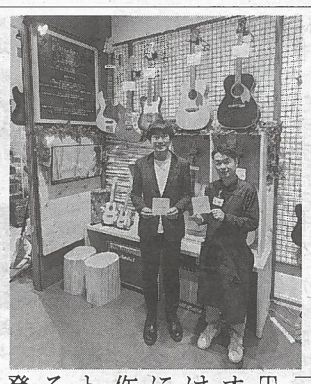
また、同社はデザイナーと連携して都城産杉の未利用材を使った知育玩具「からからつみき」「ころからつみき」を制作。ともにふるさと納税の返礼品となっており、年間で2商品合わせて100件程度の注文があるという。住宅建材・住設展示会に出展した際に自社ブースに並べて訴求しているほか、東京都内にある宮崎県のアンテナショップ「KONNE」でも今後、販売を行う予定だ。

東社長は知育玩具について「未利用材を使うことに意義があり、これからも商品を拡充させていきたい」と意欲的だ。

金沢市内の楽器店に能登ヒバの展示スペース

島村楽器とフルタニランバー

島村楽器（東京都、廣瀬利明社長）は、フルタニランバー（石川県金沢市、古谷隆明社長）とコラボし、1日から島村楽器金沢フォーラス店内に能登ヒバを使ったギターを展示するブースをオープンした。


展示ブースでの古谷社長（左）と越野正嗣同店担当ブロックマネージャー

フルタニランバーでは「ATENOTO（アテノオト）」と名付けた能登ヒバによる楽器製作プロジェクトを進めている。同社が能登ヒバの素材を楽器メーカーに提供して様々な楽器を開発することで、能登ヒバをより身近に使ってもらう機会を増やそうとしている。

今回のブースでは、単に楽器を展示するだけでなく、ブースにも木材を使用し、フルタニランバーが作成した森林の資料映像も放映している。また、実際に能登ヒバを使った楽器を演奏して音色を楽しむことができる、体験型イベントスペースとなっている。店頭販売員も実際に木材の座学や伐採現場の研修などを受講し、来場者に説明できるよう対応している。

新刊紹介

「御料局測量課長 神足勝記（こうたり かつき）日記」

日本林業調査会

御料局とは、帝室林野局の前身であり、同局が管理・経営していた森林は「御料林」と呼ばれていた。この森林からの収益は皇室費用の大半を支えていたと言われている。

わが国の森林の約3分の1は国有林が占めているが、国有林の成り立ちは明治時代に藩有林や社寺有林、地租改正により所有者が明らかにならなかった奥地の森林等が母体となったころまでさかのぼる。第2次世界大戦後の1947年に林政統一されるまでは当時の農林省、宮内省、内務省が所管する3つの森林に分けられていた。

本書（写真）はその宮内省の外局である皇室林野局の前身である御料局の初代測量課長の神足勝記氏の日記が柱になっている。日記などの1次資料から足跡を明らかにする内容で、編著者は大澤覚氏。

大澤氏は林野技官の神足勝浩氏（神足勝記氏の孫）から託された日記を約20年かけて読み解いた。初代測量課長が御料地と民地の境界を明らかにする測量や大縮尺地図の作成などにどう取り組んだのかを知ることができる。また、これら業務にとどまらずに闘病を繰り返した全生涯や人となりはどうだったか、退局後の足跡を含めて整理している。

A5判、704ページ。定価2万2000円（税込み）。問い合わせは発行所の日本林業調査会（電話03・6457・8381）まで。

大阪府に3店舗目の営業拠点

ケイアイプランニング

ケイアイプランニング（名古屋市、堀口幸昌社長）は、大阪府に同府3店舗目となる営業拠点「守口営業所」（大阪府守口市）を開設した。開設日は11月16日。

ケイアイスター不動産グループとして、同営業所を加えた大阪府内の拠点が全5店舗となった。同グループとして関西エリアの販売体制を強化していく。